に咲き、その向ふにサンムトリが青くひつそり立つてゐました。

俄かにサンムトリの左の裾がぐらぐらつとゆれ、まつ黒なけむりがぱつと立つたと思ふとまつすぐに天までのぼつて行つて、をかしなきのこの形になり、その足もとから黄金色の熔岩がきらきら流れ出して、見るまにずうつと扇形にひろがりながら海へ入りました。と思ふと地面は烈しくぐらぐらゆれ、百合の花もいちめんゆれ、それからごうつといふやうな大きな音が、みんなを倒すくらゐ強くやつてきました、それから風がどうつと吹いて行きました。

「やつた、やつた。」とみんなはそつちに手を延ばして高く叫びました。この時サンムトリの煙は、崩れるやうにそらいつぱいひろがつて來ましたが、忽ちそらはまつ暗になつて、熱いこいしがばらばらばら降つてきました。みんなは天幕の中にはいつて心配さうにしてゐましたが、ペンネン技師は、時計を見ながら、

「ブドリ君、うまく行つた。危險はもう全くない。市の方へは灰をすこし降らせるだけだらう。」と言ひました。こいしはだんだん灰にかはりました。それもまもなく薄くなつて、

みんなはまた天幕の外へ飛び出しました。野原はまるで一めん鼠いろになつて、灰は一寸ばかり積り、百合の花はみんな折れて灰に埋まり、空は變に綠いろでした。そしてサンムトリの裾には小さな瘤ができて、そこから灰いろの煙が、まだどんどん昇つて居りました。

その夕方みんなは、灰やこいしを踏んで、もう一度山へのぼつて、新しい觀測の器械を据ゑつけて歸りました。

七、雲の海

それから四年の間に、クーボー大博士の計畫通り、潮汐發電所は、イーハトーヴオの海岸に沿つて、二百も配置されました。イーハトーヴオをめぐる火山には、觀測小屋といつしよに、白く塗られた鐵の櫓が順順に建ちました。

ブドリは技師心得になつて、一年の大部分は火山から火山と廻つてあるいたり、危くなつた火山を工作したりしてゐました。

次の年の春、イーハトーヴオの火山局では、次のやうなポスターを村や町へ張りました。

窒素肥料を降らせます。

今年の夏、雨といつしよに、硝酸アムモニヤをみなさんの沼ばたけや蔬菜ばたけに降らせますから、肥料を使ふ方は、その分を入れて計算してください。分量は百メートル四方につき百二十キログラムです。

雨もすこしは降らせます。

旱魃の際には、とにかく作物の枯れないぐらゐの雨は降らせることができますから、いままで水が來なくなつて作付しなかつた沼ばたけも、今年は心配せずに植附けてください。

その年の六月：ブドリはイーハトーヴオのまん中にあたるイーハトーヴオ火山の頂上の小屋に居りました。下はいちめん灰いろをした雲の海でした。そのあちこちから、イーハ

トーヴオ中の火山のいただきが、ちやうど島のやうに黒く出て居りました。その雲のすぐ上を一隻の飛行船が、船尾からまつ白な煙を噴いて一つの峰から一つの峰へちやうど橋をかけるやうに飛びまはつてゐました。そのけむりは、時間がたつほどだんだん太くはつきりなつてしづかに下の雲の海に落ちかぶさり、まもなく、いちめんの雲の海にはうす白く光る大きな網が山から山へ張りわたされました。いつか飛行船はけむりを納めて、しばらく挨拶するやうに輪を描いてゐましたが、やがて船首を垂れてしづかに雲の中へ沈んで行つてしまひました。

受話器がジーと鳴りました。ペンネン技師の聲でした。

「飛行船はいま歸つて來た。下の方の支度はすつかりいい。雨はざあざあ降つてゐる。もうよからうと思ふ。はじめてくれたまへ。」

ブドリはぼたんを押しました。見る見るさつきのけむりの網は、美しい桃いろや青や紫に、パッパッと眼もさめるやうにかがやきながら、點いたり消えたりしました。ブドリはまるでうつとりしてそれに見とれました。そのうちにだんだん日は暮れて、雲の海もあか

りが消えたときは、灰いろか鼠いろかわからないやうになりました。

受話器が鳴りました。

「硝酸アムモニヤはもう雨の中へでてきてゐる。量もこれぐらゐならちやうどいい。移動のぐあひもいいらしい。あと四時間やれば、もうこの地方は今月中は澤山だらう。つづけてやつてくれたまへ。」ブドリはもううれしくつてはね上りたいくらゐでした。

この雲の下で昔の赤鬚の主人も、となりの石油がこやしになるかと言つた人も、みんなよろこんで雨の音を聞いてゐる。そしてあすの朝は、見違へるやうに綠いろになつたオリザの株を手で撫でたりするだらう。まるで夢のやうだと思ひながら雲のまつくらになつたり、また美しく輝いたりするのを眺めて居りました。ところが短い夏の夜はもう明けるらしかつたのです。電光の合間に、東の雲の海のはてがぼんやり黃ばんでゐるのでした。

ところでそれは月が出るのでした。大きな黃いろな月がしづかに昇つてくるのでした。そして雲が青く光るときは變に白つぽく見え、桃いろに光るときは何かわらつてゐるやうに見えるのでした。ブドリは、もうじぶんが誰なのか、何をしてゐるのか忘れてしまつて、

ただぼんやりそれをみつめてゐました。

受話器がジーと鳴りました。

「こつちでは大分雷が鳴りだして來た。網があちこちちぎれたらしい。あんまり鳴らすとあしたの新聞が惡口を言ふからもう十分ばかりでやめよう。」

ブドリは受話器を置いて耳をすましました。雲の海はあつちでもこつちでもぶつぶつぶつぶつ呟いてゐるのです。よく氣をつけて聞くとやつぱりそれはきれぎれの雷の音でした。

ブドリはスキッチを切りました。俄かに月のあかりだけになつた雲の海は、やつぱりしづかに北へ流れてゐます。ブドリは毛布をからだに卷いてぐつすり睡りました。

八、秋

その年の農作物の收穫は、氣候のせゐもありましたが、十年の間にもなかつたほど、よく出來ましたので、火山局にはあつちからもこつちからも感謝狀や激勵の手紙が屆きました。ブドリははじめてほんたうに生き甲斐があるやうに思ひました。

ところがある日、ブドリがタチナといふ火山へ行つた歸り、とりいれの濟んでがらんとした沼ばたけの中の小さな村を通りかかりました。ちやうどひるごろなので、パンを買はうと思つて、一軒の雜貨や菓子を賣つてゐる店へ寄つて、

「パンはありませんか。」とききました。するとそこには三人のはだしの人たちが、眼をまつ赤にして酒を飲んで居りましたが、一人が立ち上つて、

「パンはあるが、どうも食はれないパンでな。石盤だもな。」とをかしなことを言ひますと、みんなは面白さうにブドリの顏を見てどつと笑ひました。ブドリはいやになつて、ふいつと表へ出ましたら、向ふから髪を角刈りにしたせいの高い男が來て、いきなり、

「おい、お前、今年の夏、電氣でこやし降らせたブドリだな。」と言ひました。

「さうだ。」ブドリは何氣なく答へました。その男は高く叫びました。

「火山局のブドリが來たぞ。みんな集れ。」すると今の家の中やそこらの畑から、十八人の百姓たちが、げらげらわらつてかけて來ました。

「この野郎、きさまの電氣のお蔭で、おいらのオリザ、みんな倒れてしまつたぞ。何して

あんなまねしたんだ。」一人が言ひました。

ブドリはしづかに言ひました。

「倒れるなんて、きみらは春に出したポスターを見なかつたのか。」

「何、この野郎。」いきなり一人がブドリの帽子を叩き落しました。それからみんなは寄つてたかつてブドリをなぐつたりふんだりしました。ブドリはとうとう何が何だかわからなくなつて倒れてしまひました。

氣がついて見るとブドリはどこかの病院らしい室の白いベッドに寢てゐました。枕もとには見舞の電報や、たくさんの手紙がありました。ブドリのからだ中は痛くて熱く、動くことができませんでした。けれどもそれから一週間ばかりたちますと、もうブドリはもとの元氣になつてゐました。そして新聞で、あのときの出來事は、肥料の入れ樣をまちがつて教へた農業技師が、オリザの倒れたのをみんな火山局のせゐにして、ごまかしてゐたためだといふことを讀んで、大きな聲で一人で笑ひました。

その次の日の午後、病院の小使が入つて來て、

「ネリといふご婦人が訪ねておいでになりました。」と言ひました。ブドリは夢ではないかと思ひましたら、まもなく一人の日に焼けた百姓のおかみさんのやうな人が、おづおづと入つて來ました。それはまるで變つてはゐましたが、あの森の中から誰かにつれて行かれたネリだつたのです。二人はしばらく物も言へませんでしたが、やつとブドリが、その後のことをたづねますと、ネリもぽつぽつとイーハトーヴォの百姓のことばで、今までのことを話しました。ネリを連れて行つたあの男は、三日ばかりの後、面倒臭くなつたのか、ある小さな牧場の近くへネリを殘してどこかへ行つてしまつたのでした。

ネリがそこらを泣いて歩いてゐますと、その牧場の主人が可哀さうに思つて家へ入れて赤ん坊のお守をさせたりしてゐましたが、だんだんネリは何でも働けるやうになつたので、とうとう三四年前にその小さな牧場の一番上の息子と結婚したといふのでした。そして今年は肥料も降つたので、いつもなら厩肥を遠くの畑まで運び出さなければならず、大へん難儀したのを、近くのかぶら畑へみんな入れたし、遠くの玉蜀黍もよくできたので、家ぢゆうみんな悦んでゐるといふやうなことも言ひました。またあの森の中へ主人の息子といつしよに何べんも行つて見たけれども、家はすつかり壊れてゐたし、ブドリはどこへ行つたかわからないのでいつもがつかりして歸つてゐたら、昨日新聞で主人がブドリのけがをしたことを讀んだので、やつとこつちへ訪ねて來たといふことも言ひました。ブドリは、治つたらきつとその家へ訪ねて行つてお禮を言ふ約束をしてネリを歸しました。

九、カルボナード島

それからの五年は、ブドリにはほんたうに樂しいものでした。赤鬚の主人の家にも何べんもお禮に行きました。

もうよほど年を老つてゐましたが、やはり非常な元氣で、こんどは毛の長い兎を千疋以上飼つたり、甘藍ばかり畑に作つたり、相變らずの山師はやつてゐましたが、暮しはずうつといいやうでした。

ネリには、可愛らしい男の子が生れました。多に仕事がひまになると、ネリはその子にすつかりこどもの百姓のやうなかたちをさせて、主人といつしよに、ブドリの家に訪ねて

來て、泊つて行つたりするのでした。

ある日、ブドリのところへ、昔てぐす飼ひの男にブドリといつしよに使はれてゐた人が訪ねて來て、ブドリたちのお父さんのお墓が森のいちばんはづれの大きな榧の木の下にあるといふことを教へて行きました。それは、はじめ、てぐす飼ひの男が森に來て、森ぢゆうの樹を見てあるいたとき、ブドリのお父さんたちの冷くなつたからだを見附けて、ブドリに知らせないやうに、そつと土に埋めて、上へ一本の樺の枝をたてて置いたといふのでした。ブドリは、すぐネリたちをつれてそこへ行つて、白い石灰岩の墓をたてて、それからもその邊を通るたびにいつも寄つてくるのでした。

そしてちやうどブドリが二十七の年でした。どうもあの恐ろしい寒い氣候がまた來るやうな模樣でした。測候所では、太陽の調子や北の方の海の氷の樣子からその年の二月にみんなへそれを豫報しました。それが一足づつだんだん本當になつてこぶしの花が咲かなかつたり、五月に十日もみぞれが降つたりしますと、みんなはもうこの前の凶作を思ひ出して、生きたそらもありませんでした。クーボー大博士も、たびたび氣象や農業の技師たち

と相談したり、意見を新聞へ出したりしましたが、やつぱりこの烈しい寒さだけはどうともできないやうでした。

ところが六月も初めになつて、まだ黄いろなオリザの苗や芽を出さない樹を見ますと、ブドリはもう居ても立つてもゐられませんでした。このままで過ぎるなら森にも野原にも、ちやうどあの年のブドリの家族のやうになる人が澤山できるのです。ブドリはまるで物も食べずに幾晩も幾晩も考へました。ある晩ブドリはクーボー大博士の家を訪ねました。

「先生、氣層のなかに炭酸瓦斯が增えて來れば暖くなるのですか。」

「それはなるだらう。地球ができてからいままでの氣溫は、大抵空氣中の炭酸瓦斯の量できまつてゐたと言はれる位だからね。」

「カルボナード火山島が今爆發したら、この氣候を變へる位の炭酸瓦斯を噴くでせうか。」

「それは僕も計畫した。あれがいま爆發すれば、瓦斯はすぐ大循環の上層の風にまじつて地球ぜんたいを包むだらう。そして下層の空氣や地表からの熱の放散を防ぎ、地球全體を平均で五度位溫くするだらうと思ふ。」

「先生、あれを今すぐ噴かせられないでせうか。」
「それはできるだらう。けれども、その仕事に行つたもののうち、最後の一人はどうしても遁げられないのでね。」
「先生、私にそれをやらしてください。どうか先生からペンネン先生へお許しの出るやうお詞を下さい。」
「それはいけない。きみはまだ若いし、いまのきみの仕事に代れるものはさうはない。」
「私のやうなものは、これから澤山できます。私よりもつともつと何でもできる人が、私よりもつと立派にもつと美しく、仕事をしたり笑つたりして行くのですから。」
「その相談は僕はいかん。ペンネン技師に話したまへ。」
ブドリは歸つて來て、ペンネン技師に相談しました。技師はうなづきました。
「それはいい。けれども僕がやらう。僕は今年もう六十三なのだ。ここで死ぬなら全く本望といふものだ。」
「先生、けれどもこの仕事はまだあんまり不確實です。一ペンうまく爆發しても間もなく

瓦斯が雨にとられてしまふかもしれませんし、また何もかも思つた通りいかないかもしれません。先生が今度お出でになつてしまつては、あと何とも工夫がつかなくなると存じます。」老技師はだまつて首を垂れてしまひました。
それから三日の後、火山局の船が、カルボナード島へ急いで行きました。そこへいくつものやぐらは建ち、電線は連結されました。
すつかり支度ができると、ブドリはみんなを船で歸してしまつて、じぶんは一人島に殘りました。
そしてその次の日、イーハトーヴオの人たちは、青ぞらが綠いろに濁り、日や月が銅いろになつたのを見ました。
けれどもそれから三四日たちますと、氣候はぐんぐん暖くなつてきて、その秋はほぼ普通の作柄になりました。そしてちやうど、このお話のはじまりのやうになる筈の、たくさんのブドリのお父さんやお母さんは、たくさんのブドリやネリといつしよにその冬を、暖いたべものと、明るい薪で樂しく暮すことができたのでした。

農民藝術概論綱要

序論

……われらはいつしよにこれから何を論ずるか……

おれたちはみな農民である　ずゐぶん忙がしく仕事もつらい
もつと明るく生き生きと　生活をする道を見附けたい
われらの古い師父たちの中にはさういふ人も往往あつた

近代科學の實證と求道者たちの實驗とわれらの直觀の一致に於て論じたい
世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない
自我の意識は個人から集團社會宇宙と次第に進化する
この方向は古い聖者の踏みまた教へた道ではないか
新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある
正しく強く生きるとは　銀河系を自らの中に意識してこれに應じて行くことである
われらは世界のまことの幸福を索ねよう　求道すでに道である

農民藝術の興隆

……何故われらの藝術がいま起らねばならないか……

曾つてわれらの師父たちは乏しいながら可成樂しく生きてゐた
そこには藝術も宗教もあつた
いまわれらにはただ勞働が　生存があるばかりである
宗教は疲れて　近代科學に置換され　然も科學は冷く暗い
藝術はいまわれらを離れ　然もわびしく墮落した
いま宗教家藝術家とは、眞善若くは美を獨占し販るものである

われらに購ふべき力もなく　又さるものを必要とせぬ
いまやわれらは新たに正しき道を行き　われらの美をば創らねばならぬ
藝術をもてあの灰色の勞働を燃せ
ここにはわれらの不斷の潔く樂しい創造がある
都人よ　來つてわれらに交はれ　世界よ　他意なきわれらを容れよ

農民藝術の本質

……何がわれらの藝術の心臓をなすものであるか……

もとより農民藝術も美を本質とするであらう
われらは新たな美を創る　美學は絶えず移動する
「美」の語さへ滅するまでに　それは果なく擴がるであらう
岐路と邪路とを　われらは警めねばならぬ
農民藝術とは宇宙感情の　地　人　個性と通ずる具體的なる表現である
そは直觀と情緒との內經驗を素材としたる無意識或は有意の創造である

そは常に實生活を肯定し　これを一層深化し高くせんとする
そは人生と自然とを　不斷の藝術寫眞とし　盡くることなき詩歌とし
巨大な演劇舞踊として　觀照享受することを敎へる
そは人人の精神を交通せしめ
その感情を社會化し遂に一切を究意地にまで導かんとする
かくてわれらの藝術は　新興文化の基礎である

農民藝術の分野

……どんな工合にそれが分類され得るか……

聲に曲調節奏あれば聲樂をなし　音が然れば器樂をなす
語まことの表現あれば散文をなし　節奏あれば詩歌となる
行動まことの表情あれば演劇をなし　節奏あれば舞踊となる
光象寫機に表現すれば靜と動との　藝術寫眞をつくる
光象手描を成すれば繪畫を作り　塑材によれば彫刻となる
準志は多く香味と觸を伴へり

複合により劇と歌劇と　有聲活動寫眞をつくる
聲語準志に基けば　演說　論文　敎說をなす
光象生活準志によりて　建築及衣服をなす
光象各異の準志によりて　諸多の工藝美術をつくる
光象生產準志に合し　園藝營林土地設計を產む
香味光觸生活準志に表現あれば　料理と生產とを生ず
行動準志と結合すれば　勞働競技體操となる

農民藝術の主義

……それらのなかにどんな主張が可能であるか……

藝術のための藝術は少年期に現はれ青年期後に潜在する
人生のための藝術は青年期にあり　成年以後に潜在する
藝術としての人生は老年期中に完成する
その遷移にはその深さと個性が關係する
リアリズムとロマンティシズムは個性に關して併存する
形式主義は正態により標題主義は續感度による

四次感覺は靜藝術に流動を容る
神祕主義は絶えず新に起るであらう
表現法のいかなる主張も個性の限り可能である

農民藝術の製作

……いかに着手しいかに進んで行つたらいいか……

世界に對する大なる希願をまづ起せ
強く正しく生活せよ　苦難を避けず直進せよ
感受の後に模倣理想化　冷く鋭き解析と熱あり力ある綜合と
諸作無意識中に潜入するほど美的の深と創造力はかはる
機により興會し　胚胎すれば製作心象中にあり
練意了つて表現し　定案成れば完成せらる

無意識即から溢れるものでなければ　多く無力か詐僞である
髪を長くしコーヒーを飲み空虛に待てる顏つきを見よ
なべての惱みをたきぎと燃やし　なべての心を心とせよ
風とゆききし　雲からエネルギーをとれ

農民藝術の産者

……われらのなかで藝術家とはどういふことを意味するか……

職業藝術家は一度亡びねばならぬ
誰人もみな藝術家たる感受をなせ
個性の優れる方面に於て各各止むなき表現をなせ
然もめいめいそのときどきの藝術家である
創作自ら湧き起り止むなきときは　行爲は自(おの)づと集中される
そのとき恐らく人人は　その生活を保證するだらう

創作止めば　彼はふたたび土に起つ
ここには多くの解放された天才がある
個性の異る幾億の天才も併び立つべく斯くて地面も天となる

農民藝術の批評

……正しい評價や鑑賞はまづいかにしてなされるか……

批評は當然社會意識以上に於てなさねばならぬ

誤まれる批評は自らの內藝術で他の外藝術を律するに因る

產者は不斷に內的批評を有たねばならぬ

批評の立場に破壞的創造的及觀照的の三がある

破壞的批評は產者を奮ひ起たしめる

創造的批評は產者を暗示し指導する

創造的批評家には產者に均(ひと)しい資格が要る

觀照的批評は完成された藝術に對して行はれる

批評に對する產者は同じく社會意識以上を以て應(こた)へねばならぬ

斯くても生ずる爭論ならば　そは新たなる建設に至る

農民藝術の綜合

……おお朋だちよ　いつしよに正しい力を併せ　われらのすべての田園と
われらのすべての生活を一つの巨きな第四次元の藝術に創りあげよう
でないか……

まづもろともにかがやく宇宙の微塵となりて無方に空にちらばらう
しかもわれらは各各感じ　各別各異に生きてゐる
ここは銀河の空間の　太陽　日本陸中國の野原である
青い松並　萱の花　古いみちのくの斷片を保て

『つめくさ灯ともす宵のひろば　むかしのラルゴをうたひかはし
雲をもどよもし夜風にわすれて　とりいれまぢかに歳よ熟れぬ』
詞は詩であり　動作は舞踊　音は天樂　四方はかがやく風景畫
われらに理解ある觀衆があり　われらにひとりの戀人がある
巨きな人生劇場は　時間の軸を移動して　不滅の四次の藝術をなす
おお朋だちよ　君は行くべく　やがてはすべて行くであらう

結論

……われらに要るものは銀河を包む透明な意志　巨きな力と熱である……

われらの前途は輝きながら嶮峻(けんしゅん)である
嶮峻のその度ごとに四次藝術は巨大と深さとを加へる
詩人は苦痛をも享樂する
永久の未完成これ完成である

理解を了へばわれらは斯かる論をも棄つる
畢竟ここには宮澤賢治一九二六年のその考へがあるのみである

雨ニモマケズ
風ニモマケズ
雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ
丈夫ナカラダヲモチ
慾ハナク
決シテ瞋(イカ)ラズ
イツモシヅカニワラツテヰル
一日ニ玄米四合ト

（手帖より）

味噌ト少シノ野菜ヲタベ
アラユルコトヲ
ジブンヲカンジョウニ入レズニ
ヨクミキキシワカリ
ソシテワスレズ
野原ノ松ノ林ノ蔭ノ
小サナ萱ブキノ小屋ニキテ
東ニ病氣ノコドモアレバ
行ツテ看病シテヤリ
西ニツカレタ母アレバ
行ツテソノ稻ノ束ヲ負ヒ
南ニ死ニサウナ人アレバ

行ツテコハガラナクテモイヽトイヒ
北ニケンクワヤソショウガアレバ
ツマラナイカラヤメロトイヒ
ヒデリノトキハナミダヲナガシ
サムサノナツハオロオロアルキ
ミンナニデクノボウトヨバレ
ホメラレモセズ
クニモサレズ
サウイフモノニ
ワタシハ
ナリタイ

手紙（一）

一

わたくしはあるひとから言ひつけられて、この手紙を印刷してあなたがたにおわたします。どなたか、ポーセがほんたうにどうなつたか、知つてゐるかたはありませんか。チュンセがさつぱりごはんもたべないで、毎日考へてばかりゐるのです。

ポーセはチュンセの小さな妹ですが、チュンセはいつもいぢ悪ばかりしました。ポーセがせつかく植ゑて、水をかけた小さな桃の木になめくぢをたけて置いたり、ポーセの靴に甲蟲を飼つて、二月もそれをかくして置いたりしました。

ある日などはチュンセがくるみの木にのぼつて青い實を落してゐましたら、ポーセが小さな卵形のあたまをぬれたハンケチで包んで、「兄さん、くるみをちやう

だい。」なんて言ひながら大へんよろこんで出て來ましたのに、チュンセは、「そら、とつてごらん。」とまるで怒つたやうな聲で言つてわざと頭に實を投げつけるやうにして泣かせて歸しました。

ところがポーセは、十一月ころ、俄かに病氣になつたのです。おつかさんもひどく心配さうでした。チュンセが行つて見ますと、ポーセの小さな唇はなんだか青くなつて、眼ばかり大きくあいて、いつぱいに涙をためてゐました。チュンセは聲が出ないのを無理にこらへて言ひました。

「おいら、何でも呉れてやるぜ。あの銅の齒車だつて欲しけりややるよ。」

けれどもポーセはだまつて頭をふりました。息ばかりすうすうきこえました。

チュンセは困つてしばらくもぢもぢしてゐましたが、思ひ切つてもう一ぺん言ひました。

「雨雪とつて來てやろか。」

「うん。」ポーセがやつと答へました。

チュンセはまるで鐵砲丸のやうにおもてに飛び出しました。おもてはうすくらくてみぞれがぴちよぴちよ降つてゐました。チュンセは松の木の枝から雨雫を兩手にいつぱいとつて來ました。それからポーセの枕もとに行つて皿にそれを置き、さじでポーセにたべさせました。ポーセはおいしさうに三さじばかり食べましたら急にがたつとなつていきをつかなくなりました。

おつかさんがおどろいて泣いてポーセの名を呼びながら一生けん命ゆすぶりましたけれども、ポーセの汗でしめつた髪の頭はただゆすぶられた通りうごくだけでした。チュンセはげんこを眼にあてて、虎の子供のやうな聲で泣きました。

それから春になつてチュンセは學校も六年でさがつてしまひました。チュンセはもう働いてゐるのです。春に、くるみの木がみんな青い房のやうなものを下げてゐるでせう。その下にしやがんで、チュンセはキャベヂの床をつくつてゐました。そしたら土の中から一ぴきのうすい緑いろの小さな蛙がよろよろと這つて出て來ました。

「かへるなんざ、潰れちまへ。」チュンセは大きな稜石でいきなりそれを叩きました。

それからひるすぎ、枯れ草の中でチュンセがとろとろやすんでゐましたら、いつかチュンセはぽおつと黄いろな野原のやうなところを歩いて行くやうにおもひました。すると向ふにポーセがしもやけのある小さな手で眼をこすりながら立つてゐてぼんやりチュンセに言ひました。

「兄さん、なぜあたいの青いおべべ裂いたの。」チュンセはびつくりしてはね起きて一生けん命そこらをさがしたり考へたりしてみましたがなんにもわからないのです。

どなたかポーセを知つてゐるかたはないでせうか。

けれども私にこの手紙を言ひつけたひとが言つてゐました。

「チュンセがポーセをたづねることはむだだ。なぜならどんなこどもでも、また、はたけではたらいてゐるひとでも、汽車の中で苹果をたべてゐるひとでも、

また歌ふ鳥や歌はない鳥、青や黒やのあらゆる魚、あらゆるけものも、あらゆる蟲も、みんな、みんな、むかしからおたがひのきやうだいなのだから。

チユンセがもしもポーセをほんたうにかあいさうにおもふなら、大きな勇氣を出して、すべてのいきもののほんたうの幸福をさがさなければいけない。それはナムサダルマプフンダリカサスートラといふものである。チユンセがもし勇氣のあるほんたうの男の子ならなぜまつしぐらにそれに向つて進まないか。」

それからこのひとはまた言ひました。

「チユンセはいいこどもだ。さアおまへはチユンセやポーセやみんなのために、ポーセをたづねる手紙を出すがいい。」

そこで私はいまこれをあなたに送るのです。

註　手紙(一)　十年以上前、此の類の手紙が數種、活版や、謄寫版で印刷されて、色色の方面に送られた。

手紙（二）

八月二十九日附お手紙ありがたく拜誦いたしました。あなたはいよいよご元氣なやうで實に何よりです。

私もお蔭で大分癒つては居りますがどうも今年は前とちがつてラツセル音容易に除かれず、咳がはじまると仕事も何も手につかず、まる二時間も續いたり、或は夜は胸がびうびう鳴つて眠られなかつたり、仲仲もう全い健康は得られさうもありません。

けれども咳のないときはとにかく人並に机に坐つて、切れ切れながら七八時間は何かしてゐられるやうになりました。

あなたがいろいろ想ひ出して書かれたやうなことは最早二度と出來さうもありませんが、それに代ることはきつとやる積りで毎日やつきとなつて居ります。

しかし心持ばかり焦つてつまづいてばかりゐるやうな譯です。

私のかういふ慘めな失敗はただもう今日の時代一般の巨きな病、「慢」といふものの一支流に過つて身を加へたことに原因します。僅かばかりの才能とか、器量とか、身分とか、財産とかいふものが何かじぶんのからだについたものでもあるかと思ひ、じぶんの仕事を卑しみ、同輩を嘲けり、いまにどこからかじぶんを所謂社會の高みへ引き上げに來るものがあるやうに思ひ、空想をのみ生活して却つて完全な現在の生活をば味ふこともせず幾年かが空しく過ぎて漸くじぶんの築いてゐた蜃氣樓の消えるのを見ては、ただもう人を怒り世間を憤り、從つて師友を失ひ憂悶病を得るといつたやうな順序です。

あなたは賢いしかういふ過りはなさらないでせうが、しかし何といつても時代が時代ですから充分に御戒心下さい。

風のなかを自由にあるけるとか、はつきりした聲で何時間で話が出來るとか、じぶんの兄弟のために何圓かを手傳へるとかいふやうなことは、できないものから見れば

神の業にも均しいものです。

こんなことはもう人間の當然の權利だなどといふやうな考では、本氣に觀察した世界の實際と餘り遠いものです。

どうか今の御生活を大切にお護り下さい。

上のそらでなしに、しつかり落ちついて、一時の感激や興奮を避け、樂しめるものは樂しみ、苦しまなければならないものは苦しんで生きて行きませう。

いろいろ生意氣なことを書きました。

病苦に免じて赦して下さい。

それでも今年は心配したやうでなしに作もよくて實にお互ひ心強いではありませんか。

また書きます。

註　手紙(二)　この手紙は臨終十日前に書かれたものである。

病(いたつき)のゆゑにもくちんいのちなり
みのりに棄てば うれしからまし

昭和八年九月二十日（死の前日の作）

宮澤賢治略歴

明治二十九年八月一日　岩手縣稗貫郡花卷町豐澤町父宮澤政次郎母同イチ長男ニ生ル。

明治三十六年四月　花卷町花城尋常高等小學校ニ入學。

明治四十二年三月　同校尋常科卒業。（八歳—十四歳）

小學校時代ハ日露戰爭前後ノ凶作續キニテ、辨當ヲ持タズ登校セル子供少ナカラズ。ソノ頃ノ感激ハ、後年ノ思想ニ影響シタルモノト思ハル。

明治四十二年四月　岩手縣立盛岡中學校第一學年入學。

大正三年三月　同校卒業。（十四歳—十九歳）

中學校初學年時代ニハ極メテ眞面目ナル生徒ナリ。三年頃ヨリ登山ヤ文學ヲ好ム。四年五年頃ニハ、寺院ニ下宿シ、經典ヲ好ミ、參禪ナドス。

大正四年四月　官立盛岡高等農林學校農學科第二部入學。特待生。

大正七年三月十五日　同校農學科第二部卒業。地質土壤肥料研究ノ爲盛岡高等農林學校研究生トシテ在學。

大正七年四月十日　稗貫郡土性調査ヲ囑託サル。

大正七年五月十日　盛岡高等農林學校實驗指導補助ヲ囑託サル。

大正七年八月二十四日　同校實驗指導囑託ヲ解カル。

大正九年春　「歌集」脫稿約六百五十首。（未發表）

大正九年五月二十日　盛岡高等農林學校地質學研究科修業。（二十歳—二十五歳）

農林學校一年ノ時、始メテ「妙法蓮華經」ヲ讀ミ驚嘆、信仰厚シ。

登山、讀書、科學實驗ニ專念シ、卒業ス。

大正十年一月　東京ニ居住。（同年七月歸省）（二十六歳）

信仰最高潮時代ニテ、無一物ニテ上京、校正ヲ職トシ、夜間ハ國柱會ノ奉仕事務ヲ執ル。

童話ノ創作熱强ク、歸宅ノ節ハ現存ノ童話ヨリ大量ノ原稿ヲトランクニ滿シ居タリ。

大正十年十二月三日　岩手縣稗貫農學校（翌年花卷農学校ト改稱）教諭ニ任ゼラル。（二十六歳）

大正十一年一月　「春と修羅」起稿。（二十七歳）

一月六日、雪ノ小岩井農場ニテ得タル詩ヲ始メトシ、以後七年間ノ刻々明滅スル心象ヲ配列シテ行ツタ詩集「春と修羅一、二、三、集」ハ、人類ノ四次元世界ノ記錄トモ考ヘラレル。

大正十二年八月　北海道樺太ヘ旅行。（二十八歳）

大正十三年四月二十日　詩集「春と修羅」上梓。

大正十三年八月　農學校生徒ニヨリ、自作ノ劇「饑餓陣營」「植物醫師」「ポランの廣場」「種山ケ原の夜」ノ四種ヲ自ラ監督シテ上演ス。

大正十三年十二月一日　童話集「注文の多い料理店」上梓。（二十九歳）

ドリームランドトシテノ岩手縣「イーハトーヴオ」童話集ハ一ノ「田園ノ產物」デアリ「正シイモノノ種子ヲ有シ、美シイモノノ發芽ヲ待ツ」モノデアル。

大正十四年　岩手縣開設國民高等學校囑託ニ命ゼラル。

大正十三年　同十四年「春と修羅」第二輯脫稿。（三十歳）

大正十五年三月卅一日　花卷農學校依願退職。

大正十五年四月　花卷町下根子ニ羅須地人協會開設。同所ニ於テ農耕ニ從事、自炊

ス。同時ニ肥料設計事務所ヲ縣内數ケ所ニ設ケ、無料設計農事相談ニ應ズ。其他各地農村ニ於テ講演講話ヲナシ爾後生前迄續ク。

大正十五年　「農民藝術概論」ヲ草ス。（三十一歳）

昭和二年　「春と修羅」第三輯ヲ草ス。（三十二歳）

昭和三年七月　伊豆大島旅行。「三原三部」ヲ記ス。

昭和三年八月　發病歸省。（三十三歳）

昭和六年三月　一時平癒

昭和六年四月　東北碎石工場技師ニ聘セラレ、炭酸石灰製法改良加工並ニ販路斡旋ニ努ム。

昭和六年九月十九日　出京ト同時ニ再ビ發病歸宅。（三十六歳）

「詩碑」ニ刻マレタ詩「雨ニモマケズ風ニモマケズ」ハ十一月三日附デ手帖ニ記サレテアル。

昭和八年八月二十二日　「文語詩稿」百篇完成。（未定稿約百篇）

チエホフノ一頁ヲ三行デ書キ得ルト言ツタトモツタヘラル。

昭和八年九月十九日　急性肺炎ノ徴候見ユ。

昭和八年九月二十一日　正午、『知己ノ方ニ法華經全品、一千部位、表紙赤色、校正北向

氏、贈呈下サレ、ソノ後記ニハ「私ノ全生涯ノ仕事ハ此ノ經典ヲアナタニオトドケシ、ソノ佛意ニフレテ無上道ニ入ラルルコトヲ」ト言フ意味ヲ。後ハマク後デ起キテ書キマス』ト遺言ス。

午後一時三十分オキシフルニテ身體ヲ拭キ終ヘテ死亡ス。（三十八歳）

亡き師に捧ぐ（後記）

茲に僭越乍ら恩師宮澤先生の名作選を世におくるのは、各方面の方々に先生の遺作を見て戴き、考へて戴いて、藝術家たり宗教家たり科学的聖農たりし著者を通じて、藝術も宗教も農業も見直していたゞきたいためである。

大正十五年に、三十一歳の恩師宮澤賢治先生は「農民藝術概論」を草してその一部を當時の生徒と農村の青年に口述したきり、その大量の作品と共に未發表のまゝ、筐底深くこれを藏し死後に至つて生前の知己、高村光太郎氏、草野心平氏、藤原嘉藤治氏、菊池武雄氏等の御盡力と、横光利一氏の御助力によつて、はじめて「全集」として出版せられたのであつた。

けれどもこの本は間もなく絶版となり、いづれも少數の愛好家の手に止まつたきりで、如何程探しても入手出來ぬこととなつた。

……おれたちはみな農民である　ずゐぶん忙がしく仕事もつらい
われらは世界のまことの幸福を索ねよう　求道すでに道である……

これは、「農民藝術概論」の冒頭の言葉であるが、何と我々の勇氣を鼓舞する言葉であらう。

……われらに要るものは
銀河を包む透明な意志　巨きな力と熱である……

その結論を讀むときに、何と我々は希望と力を與へられることか。

そして、死後に發見せられた手帖の詩篇や言葉がどれほど、ひとの肺腑を突くと共に、ひとを正しく導くであらうか。

私は若くして逝かれた恩師宮澤賢治先生の靈が、強く、強く我が藝術を、我が農村を、我が國家を護つてゐることを深く信ずるものである。

なほ、この名作選を編むに當つては、どの作品を選び、どの詩を採るか、これらをどう排列するかについて、隨分苦心をした。作品への愛着から成るべく珠玉の一顆も割愛したくなかつたので、そのため六〇〇頁に達する大冊となつた。「全集」に未載のものも加へられた。いづれも、亡き師の遺風と氣品を失はぬことに努めたつもりである。

本書の序文は、大正十三年刊行の、イーハトーヴォ童話集「注文の多い料理店」の廣告に際して、著者自ら草した文章である。

最後に作品年表については、童話の年代が殆んど不明なのでその明記を避け、多少說明をつけた略歷に代へた次第である。

詩の年代も不明の點があるので多少製作順と前後してゐることと思はれる。

昭和十四年早春

山形・鳥越邑「土に叫ぶ館」にて

松田甚次郎

昭和十四年三月七日第一刷発行
昭和二十四年六月二十日第十三刷発行

宮澤賢治名作選下
定價貳百円

著者　宮澤賢治
編者　松田甚次郎
東京都千代田區神田駿河台三ノ四
発行者　伊藤竹男
長野市岡田町一七六
印刷者　田中重彌

発行所　東京都千代田區神田駿河台三ノ四　株式会社　羽田書店
会員番号A一〇八〇二三号
電話　神田(25)〇三一〇番〇五七四番〇四二七八番

（大日本法令印刷・製本）

松田甚次郎著

土に叫ぶ

——改訂版——

B6 三二〇頁
定價 百二十円
送料 三十五円

恩師宮沢賢治の衣鉢をつぎ、新しき文化農村の建設に卅五年の短くも崇高なる生涯を捧げた義農松田甚次郎の逞しき実践の記錄である。農村と農民とを限りなく愛する彼の偉大なる精神は、本書を通じて永遠に人心をうちつゞけるであらう。

内容

一 恩師宮沢賢治先生
二 郷土・鳥越部落
三 村芝居
四 隣保館
五 婦人愛護運動
六 我家と私
七 私の農業経営主義と実績
八 最上共働村塾
九 農村行脚
十 來訪者を語る
十一 農村の種々相

終